

写真：中国・四川省光明村の菜の花畑

Contents

巻頭言	1
特集：農業と災害・国際協力	2
CODE 未来基金 NEWS	8
プロジェクトレポート	10
イベントレポート	12
スタッフ活動記録・今後の予定	14
会員・寄付者ご芳名	15
活動へのご協力をお願い	16

巻頭言「発足から 20 年 今後の活動を見通す 1 年に」

阪神・淡路大震災の経験を踏まえ、CODE が NPO 法人として産声を上げたのは 2002 年 1 月 17 日。今年は発足 20 年の節目の年に当たる。くしくもコロナ禍で活動の制約が避けられない状況にあるが、CODE は立ち止まることを知らない。オンラインを活用して海外ともつながり、互いの経験を共有したり自らの活動に生かしたりしている。

世界に目をやると、コロナ禍に加え、生きることを脅かされるような事態が続出している。アフガニスタンでは米軍撤退を機にイスラム主義組織タリバンが復権、ミャンマーでは軍事クーデターが起これり、ウクライナにはロシアが侵攻、大勢の人たちが国外に避難している。

CODE はそうした厳しい環境にある人のことを気かけ、できることを探そうとする。27 年前の阪神・淡路大震災で、70 余りの国々から寄せられた支援を胸に刻み、「困ったときはお互い様」という DNA がそうさせている。

混沌とした日々ではあるが、この 20 年の来し方を振り返り、これからの活動を見定める 1 年にできればと思う。世代を超えて活動をつないでいくことも大切だが、幸い、若い方々が行動を共にしてくれている。

私たちが幾度も口にしてきた「最後の一人まで」。そのためには「人と人」としてしっかりつながり、どんなかわりができるのかを具体的に思い描いていくことだろう。鳥の目より、虫の目を大事にしたい。

(CODE 理事 西海恵都子)

農業と災害支援・国際協力



1. CODE が被災地で取り組んできた農業支援

災害は、ある日突然やってきて人の暮らしを奪っていく。

CODE は、阪神・淡路大震災以降、世界 35 の国と地域で 65 回の救援活動を行ってきました。時に住宅を再建し、時に生業を回復し、時に住民の集う場を提供するなど災害後の被災者の暮らしの再建に注視してきました。特に、農業は現地の風土に応じた食を産みだし、被災者の健康と生活を支え、復興において非常に重要な意味を持ちます。これまで CODE が被災地で現地の住民と共に実施した農業について、アフガニスタンやハイチの事例から考えます。(吉椿)

ハイチ地震からの復興と農業問題

2010 年ハイチ地震の復興支援

2010 年、中米ハイチで死者約 23 万人と甚大な被害を出した地震が起き、阪神・淡路大震災以降、最も多くの死者数を出した災害となった。

CODE は、地震後すぐにメキシコの仲間を派遣し、移動診療所や孤児院の支援、マイクロファイナンス（小口融資）で露天商の女性たちの生活再建支援などを行ってきた。

そして、メインプロジェクトとして「農業技術学校建設」を行った。現地で 37 年暮らしていた修道女、シスター須藤昭子さんが現地の人と共に立ち上げた NGO、GEDDH が、ハイチで崩壊しつつある農業の再生や山に環境保全のための植林などの活動を行っていた。地震後の復興の中で、現地の人たちがきちんと食べ、生活できるように農業を学ぶことの重要性を考え、シスター須藤さんたちと共に農業技術学校「ETAL」の建設に至った。校舎は 2015 年に完成し、現地の司教会、修道女会、GEDDH、CODE が顧問会として運営をサポートし、現在も若者たちが農業を学んでいる。



完成した農業技術学校 ETAL の校舎

ハイチの農業問題とその背景

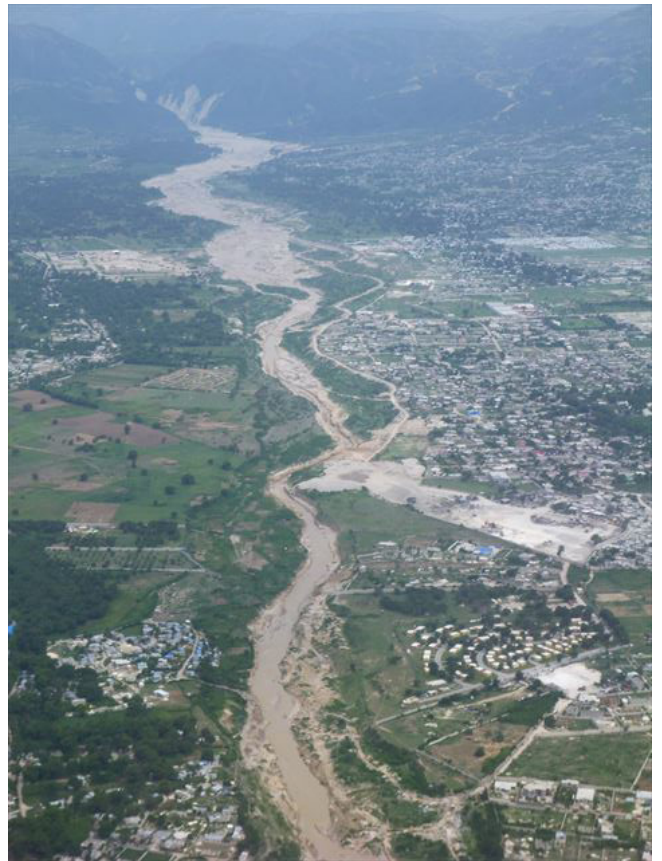
ハイチは、現在「西半球で最も貧しい国」と言われるが、かつて「カリブ海の真珠」と呼ばれ、豊かな自然資源に恵まれ、その農海産物の輸出が宗主国フランスに莫大な富をもたらした。また、1804年に黒人初の独立国となったことがハイチ人の誇りでもあった。

だが、独立に際してフランスによる多額の賠償金を背負われ、財政破綻によってその後の発展が遅れたこと、独立後の度重なるクーデターによる政情不安、森林被覆率がわずか1.25%であるためハリケーンや降雨の度に土砂災害による農地・家屋被害が起きること、これらがハイチを貧困に陥らせた要因と言われる。

最も深刻なのが、アメリカによる自由貿易政策で関税が35%から3%に引き下げられたことである。ハイチの美味しいお米は安く買ったかれ、自分たちはアメリカから輸入させられた安い米を食べざるを得ない状況となっている。やる気を失ったハイチの農民は首都へと流入し、スラムを形成し、治安が悪化していくという悪循環に陥り、農業が崩壊した。

また、地震後の支援で米国企業モンサント社は、救援物資の名のもとに遺伝子組み換えのトウモロコシの種子475トンを送った。これは、ハイチの農民が今後、モンサントの種子と肥料、農薬を買い続けなくてはならなくなることを意味し、ハイチの農業、食文化を奪うことになる。これはハイチに限ったことではない。自給率の低く、TPP問題を抱える日本は他人事である。ハイチはそんなことを私たちに問いかけている。

CODEは、災害後の被災地で現地の暮らしや文化、習慣を尊重した支援を実践してきた。農業はまさに現地の暮らしと密接につながっている文化そのものである。今、被災地ハイチでは、若者たちがETALで農業を学び、自立の道を歩み始めている。若者の多いハイチは希望に満ちている。(吉椿)



森林被覆率の低いハイチでは水害が多発している



農業技術学校 ETAL で学ぶ若者たち

アフガニスタンのぶどう農家支援



アフガニスタンの農業支援から学ぶ

CODE は 27 年前の阪神・淡路大震災がきっかけに、「困った時はお互い様」をモットーに自然災害の被災地支援を主たる活動として続けてきた。実はアフガニスタンのように 20 年以上も続いた紛争後の被災地支援ははじめてのケースであった。しかもアフガニスタンの場合は世界で最貧国と言われた国で、「9・11」後に連日のように、その暮らしぶりが国際社会に報道された。CODE はその悲惨な状況を「見て見ぬふりはできない!」と、活動をスタートした。

CODE の支援方針の基本は、あくまでも被災者主体を基軸に①援助の届かない地域や人を優先的に支援する。②被災国の文化を尊重する。③お互いに学び合うの 3 つである。アフガニスタンは 98% がモスリムの国で、当然イスラム教からくる宗教文化や生活習慣の違いを尊重しなければならないことは言うまでもない。

ぶどう畑の再生事業を支援

先述したように CODE の基本方針には、根底に「被災者主体」ということがある。従ってある地域では、主産業であるぶどう栽培の支援を通して、暮らしの再建を図り、地域の人々の営みを取り戻すことができるだろうと考えた。ぶどうは 3 年で換金できる作物であることから、少しでも生計の一助になれば、そこから自立の一步が踏み出せるからだ。そもそも筆者が 2002 年 8 月に、はじめてアフガニスタンに入り滞在中に車窓から偶然ぶどうの産地を見た時に衝撃を受けたことに始まる。そこで見た光景は、タリバンに焼き尽くされ、真っ黒に焼けたぶどう畑の姿だった。生計のもととなる農業すらも破壊するということが理解できなかった。後にわかったことだが、国連のレポートでもこの地域は「98% の破壊!」と紹介されたほどの地域だ。しかし、再びその地を夕暮

れに訪れた時に、まだ「9・11」後の治安が安定しない中で、数人の若者が畑を掘り起こし、ぶどうの苗を植える作業をしていた光景に出くわした。「きっとぶどうは蘇る!」と確信した瞬間だった。

ぶどう農家を支援するにあたって、300 万円の小口融資資金を提供して生産者共同組合を立ち上げ、農家自身の主体的な関与によって、いわゆるマイクロファイナンス事業をスターとすることになった。アフガニスタンでは、イスラム教に基づく「シャリーア法」があり、農民だけではこうした事業ができず、ショーラという地域の権威ある宗教者による決裁が不可欠だということがわかった。「被災国の文化を尊重する」ことは当然だ。

300 万円を原資にマイクロファイナンスがスタート!

ぶどう農家を支援するにも、当時で 20 年以上も続いた紛争のため、ぶどう栽培の担い手が他界したケースが少なくなかった。特に世帯主を紛争で亡くし、寡婦といわれる女性たちは、生計を維持するための畑を所有していても、農夫を雇わなければぶどう栽培ができない。そこで、マイクロファイナンスを使って、ある農家は農夫を雇う費用に、ある農家は農機具を購入する費用に、またある農家はぶどうの苗を購入する費用に使うことを提案した。しかし、こういうこともショーラに決議して貰わなければ前に進まなかったが、大変協力的だった。ただ、マイクロファイナンス事業を運営するにあたって CODE は全く条件をつけなかった。被災者主体とイスラムの文化を尊重したからだ。融資に利息として 2% をつけて返却するということも決め、まず 288 世帯のぶどう農家を対象にしてスタートした。20 年が経過して 550 世帯に増えた。つまり、先に借りた農家が元金と共に 2% の利息をつけ返却し、次に借りに来た農家に貸すということをコツコツ続け、550 世帯にまで広がった。

日本で不耕起農業を学ぶ

マイクロファイナンス事業は順調に行っていた一方で、2005年の訪問時に農家の一人が、「最近、化学肥料や農薬のせいか、収穫量が極端に減ってきた」と言った。「何故だと思うか？」と問うたところ、「農薬や化学肥料を使ってきたので、土が悪くなったのだ!」と言った。「その通りだと思う。ただ、土を根本から良質のものに変えるには、10年かかるよ!」と伝え、すかさず「どうすればいいのか教えてくれ! 10年かかってもやるよ!」ということになった。この頃アフガニスタンでは極度に治安が悪化したために、これまでのように現地に行くことが難しくなってきた。そこで、ぶどう農家を日本に招聘し、ぶどう栽培を有機で育てることを学ぶことをJICA事業に申請し採択された。山梨の農家で「不耕起栽培」でぶどうを育てている農家に会い、2007年～2009年の3年間学んだ。農家は帰国して学んだことをすぐに実践し、レーズンに加工し、日本へ輸出するという取り組みを始め、CODEが販売を担ってきた。まだまだ販売量が少ないので航空便で運ぶために、日本で販売されているレーズンの何倍もする価格だが、自然の味で、昨年のアフガニスタンの政変までは販売できていたが、以後はストップしている。



再びぶどうが実った

よみがえれカレーズ

農業には、“水”は欠かせない。しかし、アフガニスタンは例年早魃で苦勞している。年間の降雨量は200mmほどだ。ちなみに日本では豪雨の時は一日で200mmも降ることは少なくない。ただ、ぶどう栽培にはそれほど水を必要としない。つまり、ぶどう栽培にアフガニスタンの気候が適していたということだ。加えて、人々の暮らしを支えてきたライフラインが、紀元前からあったと言われる“カレーズ”という暗渠型地下水路だった。西アジアで4000年前という最古の起源を持つアフガニスタンのぶどうだが、この歴史を刻み続けてきたカレーズがアフガニスタンの人々の暮らしを支えてきた。アフガニスタンでは、「お金がなくても生きていけるが、あのヒンズークシュ山脈に雪が積もらなければ生きていけない」という格言がある。このカレーズの水が途切れることさえなければ、何十年と紛争で苦難に遭っても、きっとアフガニスタンは蘇るというものだ。

(CODE 理事 村井雅清)



暗渠型地下水路カレーズの清掃



女子学校での植樹

2. 若者とともに農を学ぶ ～丹波の農家からのメッセージ～

CODE 未来基金では、若者たちと一緒に兵庫県丹波市で農業を学ぶプロジェクトに取り組んでいます (pp.8-9)。フィールドワークや勉強会を重ねる中で、若者たちは農業と国際協力、災害とのつながりを少しずつ理解したり、様々な人とのかかわりを通じて生き方を見つめ直したりしています。

このプロジェクトでは、丹波市市島地区の農業グループ「ムラとマチの奥丹波」(ムラマチ)のみなさんにご協力いただいています。代表の荻野拓司さん、そしてムラマチと CODE をつないでくださり、ご自身でも農業を営む山本健一さんから、メッセージをいただきました。

若い目で捉える「農」に期待して！

私は兵庫県丹波市で「丹波いちじまふぁーむ」という農園を開園しており、また、農園に隣接した場所に「奥丹波の森」を設けて、森林に関わる活動をしています。

農業に関しては、いつの時代も厳しい側面から捉えられることが多く、このことは、現在に至っても多くの課題を抱えていると認識しているところです。

農業は作物を作ることが基本ですが、私は以前から、さらに農産加工や、飲食、マーケティングを取り込んだ「農の6次化」への取り組み、さらには、消費者や子供たちに体験の機会を持っていただく活動、食・農育につながる活動をめざしているところです。

地域では、都会からムラに移り住んだIターン農業者、および都市住民で「ムラとマチの奥丹波」(通称：ムラマチ)というグループを作り、ムラとマチをつなぐ活動をしています。

農業問題は食の問題です。食糧自給率が極めて低く、輸入に頼る日本がいつまでも食糧を確保できるかという問題、また、食の安全性の問題として、農業に頼った農産物の問題などがあげられます。

最近、問題意識のある若い人の就農も増えてきたように思いますが、2年前に CODE とのご縁で学生さんたちと農作業をし、テーマを持って話し合う機会が持てたことを大変嬉しく思います。

若い目で、農業を捉えて行動され、前向きに思いを発信してくれることを心から期待しています。

丹波いちじまふぁーむ&奥丹波の森
代表 荻野拓司(おぎのひろし)



若者たちとムラマチの農家さんとの意見交換



黒大豆味噌作り体験を通じて、身近な食品が
農産物からどのように出来るのか学ぶ

農業から自然の理（ことわり）を知る

新聞の科学季評に京都大学前総長の山極壽一氏が『自然に従う労働の豊かさ』という題の一文を載せた。このタイトルを見て農業の原点は「ヒマラヤの今だ!」と思った。そこは、私の子どものころと同じ光景だった。畑でおじいさん、お父さん、子どもの三代が一緒に農作業をしている。生きるための営みだ。労働の豊かさを感じているかどうかはわからないが、彼らの日々の生活に迷いはない。

今、日本では農業は主流の仕事から遠ざけられている。そして、「労働の豊かさ」を感じる働き方をしている人は多くないのではないかと思う。国民に就農を、というつもりはないが、山極氏は「農業は共感力を高め、共助の精神を醸成する仕組みだ」と言う。私は丹波で農家の人と一緒に作業しながらそのことを実感している。「共助」は災害支援の現場でも一番大事なことである。農業からそんなことを学んだ。

MOTTAINAI やさい便

農業支援から始まったやさい便。これは2021年4月に田舎と町をつなぐ活動として始めた。丹波の野菜を私の知り合いの家族に『子育て支援やさい便』として無償で届けている。その野菜をCODEに持って行ったら、その一部を近くの国際交流シェアハウス『やどかり』に持って行かれた。野菜は外国人留学生などを支える食材になっている。ベトナム寺院や子ども食堂にも届けている。

私が丹波から運ぶやさい便の量が増えた。そして、今は出荷基準に合わない、形が悪い、少し傷がある新鮮な野菜を調達している。

農家の人は無償であげると言うが、育てた労に報いるために謝礼を払っている。この野菜は農家の人も野菜を受け取る人もどちらも笑顔になるやさい便になっているだろう。

山本健一（やまもとけんいち）



手刈りの稲刈り体験を通じて、若者たちも「農業が共助の精神を醸成する」ことを体感した



山本さんが届けてくださる新鮮な野菜たち

CODE 未来基金 NEWS

丹波農業 プロジェクト

第3回フィールドワーク

日程：2021年10月2～3日

参加者：氏家里菜さん（兵庫県立大学大学院
博士前期課程1回生）

勝川真凧さん（同志社大学2回生）

黒瀬天孝さん（大阪大学1回生）

駒田大地さん（兵庫県立大学大学院
博士前期課程1回生）

陶冶さん（兵庫県立大学大学院博士課程5回生）

森本莉永さん（豊岡市地域おこし協力隊）

山村太一さん（神戸学院大学3回生）

同行者：吉椿

※学年は当時

第3回フィールドワークでは、前回手植えした田んぼでの稲刈りと、前回植えたサツマイモの収穫を行いました。また、夜の意見交換会では、丹波に移住してきたムラマチの皆さんの地域とのかかわりについて伺ったり、学生が企画中の食育イベントについてアドバイスをいただいたりしました。



手刈りで稲刈り



サツマイモの収穫



稲わらの束ね方を教わります

参加者の感想（抜粋）

- みんなで同じ目標に向かって汗水垂らすことにより、様々な会話が生まれ助け合いが生まれ絆が深まっていく。農業から生まれくることが防災や国際協力に非常に大切なことであると感じた。
- その土地の文化や生活を知ることが、移住してきたりしたときに生活するうえでとても大切だとわかった。それが、その土地の自然災害と上手く付き合っていくことにも繋がっているのだと思った。
- 奥丹波に移住してきたムラマチの皆さんの話を聞く中で、普段都市に住んでいる私たちよりも、農業を介して人間の原点に近い状態にあるのではないかと思った。
- ムラマチの方々がサツマイモのことをまるで我が子のように笑顔で語る様子を見て、傷つけちゃいけない大切なものだと思い、慎重に作業した。綺麗な形で掘り起こせた時は、とても嬉しくて、もっとこの姿を見たいという気持ちになった。

第4回フィールドワーク

日程：2022年3月28～29日

参加者：杉田かなえさん（丹波篠山市地域おこし協力隊）

中田樹さん（豊岡市地域おこし協力隊）

森本莉永さん（豊岡市地域おこし協力隊）

山内優さん（関西大学3回生）

同行者：吉椿、立部



地道な種蒔きもみんなでやると楽しい

第4回フィールドワークでは、ジャガイモ植え付けや黒大豆味噌作りを行い、意見交換では「農業と国際協力」をテーマにディスカッションしました。



ジャガイモ植え付け



作った黒大豆味噌は2年間熟成させる

参加者の感想（抜粋）

- ただ体験として農作業をするのではなく、農業について、百姓について、本質的なことをひとつひとつの作業から考え、話し、教えていただくことで、農について様々な角度で、また自分ごととして考えることができた。起きている問題は現場にあり、今回のように実際に足を運んで五感で学ぶことができるワークショップは実りのある会になった。
- “日本の農業×国際協力”の内容で議論出来たことで、私にとって議論したかったこと誰かに伝えたかったことをアウトプットする貴重な経験になったし、様々な分野で活躍される方々の話をたくさん聞いて、多岐に渡って意見交換して、お互いに学び合うことのできた本当に素敵な時間だった。
- 「水と土と空気は人間が作ったものじゃないことを忘れてはいけない」という言葉に、私はあくまで自然の力を借りて、野菜を育てさせてもらっているのだとハッとさせられた。フィールドワークを通して、十人十色の哲学に触れられたことは、とても大きな学びだった。
- 目の前にいる人のストーリーにどれだけの苦労や悩み、喜びがあって今があるのか想像しただけで胸がいっぱいになり自分の小ささに気づく。丹波で出会った方々はとてもかっこよかった。何かに夢中になって一生懸命努力する姿、仲間と一緒にひとつになって取り組む姿には心を打たれた。私もそんな大人になりたいと強く思った2日間だった。

食育イベントを開催しました

学生たちが、丹波での学びをもとに自分たちでも何かできることはないかと考え、子ども向けの食育イベントを企画しました。子ども食堂や学習支援を行っている「レンタルスペース & A」の河野さんらにご協力いただきました。イベントでは、ムラマチのみなさんにインタビューして作成した動画を一緒に見たり、ムラマチのみなさんが育てた有機野菜を生で試食したりして、野菜がどうやってできるのか、どんな味がするのかを子どもたちと一緒に考えました。



有機野菜の試食



学生企画による食育イベント



農家さんからのメッセージを通じた子どもたちとの交流

トンガ火山噴火災害救援プロジェクト

トンガ火山噴火災害の概要

日時：2022年1月15日17時頃（日本時間13時頃）

場所：海底火山フンガトンガ・フンガハアパイ（トンガタブ島の北約65km）

被害：トンガタブ島、エウア島、ハアパイ島、ノムカ島、
マンゴー島などで津波や火山噴火による降灰などの被害が甚大

※津波…トンガ国内で最大15mの津波が発生

日本・奄美大島で120cm、チリで174cm、

米国カリフォルニアで131cmの津波を観測

※火山噴火…噴煙は高度16000mまで上昇し、半径260kmに広がった。首都ヌクアロファでは15cmの降灰、約40万トンの二酸化硫黄が放出された。

人的被害：死者4人、負傷者14人

被災者8万8000人（全人口10万6000人の約84%）

物的被害：家屋倒壊全壊50棟、損壊238棟
（約2400人が住む場所を奪われた）

その他の被害：津波による送電線の切断で通信困難、火山灰降灰による飲料水汚染、健康被害、農業被害など



NZ Defence Force <https://www.nzdf.mil.nz/nzdf/search-our-libraries/images/?collection=Tonga+respo+nse&tags=>

CODEの支援活動

CODEは直後から情報収集を開始しましたが、現地の通信が遮断されていたことで報道も少なく、詳細な把握が困難な状況が続きました。その後、徐々に状況が見えてくる中で、トンガ在住の農業経営者ニシ・ミノルさん（日系3世）をご紹介いただき、ニシさんを通じた支援を模索してきました。

トンガでは津波で海水を被った農地、また火山灰の降り注いだ農地で農作物が枯れています。この災害で被害を受けた農業世帯は、1万2000世帯（WFP）と言われ、トンガの主要産業である農業が非常に厳しい状況に陥っています。トンガの全輸出品に占める農業の割合は7割ですが、海外に出荷する農作物どころか自給の農作物も不足しています。ニシさんや契約農家たちの農場でも、火山灰の降灰によってニュージーランドに輸出する予定で植えたばかりスイカなどの農作物が全滅してしまいました。また、ニシさんの農場ではこの災害とコロナ禍でスタッフを大幅に解雇してしまったそうです。

ニシさんによると、農業を再開するために、農作物を再度作付けするための種・肥料や、装備（マスク、ブーツ、作業着、手袋）、農機具（鍬、じょうろ、熊手、電気柵用のソーラー）などが必要だということです。資材や道具を提供することで、農家の生活再建支援をしていきます。

トンガの概要

名称：トンガ王国

首都：ヌクアロファ（トンガタブ島）

国王：トゥポウ6世（1000年以上続く王政）
1970年イギリスから独立

人口：106,000人

※70%の約7万5000人がトンガタブ島に居住

言語：トンガ語、英語

宗教：キリスト教

季節：雨季（11月～4月）と乾季（5月～10月）

平均気温は25℃～29℃

面積：748km²（奄美大島より少し大きい）

※トンガタブ、ハアパイ、ババウ、ニウアスの4つの諸島からなる。172のある島のうち、約40の島に人々が居住している。

産業：農業、漁業、観光業など（出稼ぎ労働者の送金）

※日本へもカボチャやマグロを輸出している。

スポーツ：ラグビーなど

※日本でもラグビーや相撲でトンガ出身選手が多い。



降灰による農作物の被害
（トンガタブ島、ニシさん提供）

アフガニスタン救援プロジェクト

2021年8月15日、イスラム主義勢力タリバンによって全土を制圧されたアフガニスタンですが、前号でもお伝えしたようにこれまでCODEのぶどう再生プロジェクトを共にやってきたカウンターパートR・Lさん（2017年逝去）のご子息、F・Lさん（23歳）は、タリバンによる統治に不安を抱え、家族12名の国外退避を希望しています。CODEは、F・Lさんと連絡を取り、スウェーデンやアメリカなどへの国外退避の方法を共に模索してきました。ベルギー在住のCODEの元スタッフTさんとも連携し、ベルギーやドイツへの退避も検討しましたが、未だ国外退避に至らず、アフガニスタンで不安な日々を送っています。

CODEは、これまで関西NGO協議会や外務省定期協議会などを通じて、アフガニスタン人の退避者受け入れについて、家族帯同などの要望や声明を出してきましたが、現在、日本に退避してきた人は、約500名に留まっています。

また、アフガニスタンから神戸市内に退避してきた男性にも、新鮮な有機野菜を届けながら、現地の状況や日本での生活の課題を聴いています。幸運にも日本に退避できたとしても、アフガニスタンに残る家族のこと、日本での言葉や文化などの習慣、仕事などの課題が山積しています。引き続きご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。（吉椿）



2022.2.24 ウクライナ・ロシア支援

ウクライナおよびロシアからの避難民への食糧支援

2月24日、ロシア軍が隣国ウクライナに軍事侵攻し、国連人権高等弁務官事務所（UNOHCHR）の4月20日時点の発表ではウクライナでの民間人の死者が2,345人、負傷者が2,919人に上るとされる一方、ウクライナ東部マリウポリでは死者が数万人に上るとも言われています。また、国内避難民約700万人、国外避難民約513万人と戦火を逃れ、避難している人は1200万人を超え、ウクライナの人口の4分の1以上が不安な避難生活を送っています。また、ロシアでは反戦デモで拘束された人は1万4000人を超え、言論統制や人権侵害などから国外へ脱出する人は、20万人を超えたと言われています（3/15現在）。

CODEは、ウクライナだけではなく、ロシアから日本に逃れてきた避難民に対して食糧支援を行います。すでに昨年のタリバンによるアフガニスタン政変からの退避者や在住ベトナム人の技能実習生や留学生へ食糧支援を行ってきたことから、ウクライナやロシアの避難民へもその枠を広げて支援します。ご支援、ご協力のほどお願いいたします。（吉椿）



避難民への食糧支援を行います

CODE 寺子屋 2021

若者と難民について考える
～多文化共生社会の実現に向けて～

2021年度のCODE寺子屋は「難民」をテーマに2回シリーズで開催しました。2021年2月のミャンマーでの軍事クーデター、同年8月のアフガニスタンでの政変、2022年2月以降のウクライナ危機、さらに気候変動によって今後起こり得る大規模災害など、世界中で大量の「難民」が発生する中、また、日本の入管施設の長期収容等の問題が叫ばれる中、私たちは「難民」についてしっかり学び、考えていく必要があります。これからの多文化共生社会の実現に向けて、難民を取り巻く世界と日本の課題について、若者たちと学び、考えます。

開催概要

第1回「高校生とワークショップで考える難民問題」

日時：2021年12月19日（日）13：20～14：45

講師：中尾秀一氏（アジア福祉教育財団難民事業本部関西支部長代行）

※ワン・ワールド・フェスティバル for Youth と同時開催

第2回「外国人の入管施設の現状と課題」

日時：2022年1月24日（月）18：00～20：00

講師：平野雄吾氏（共同通信エルサレム支局長）

※いずれもZoomによるオンライン開催

主催：CODE 海外災害援助市民センター、CODE 未来基金

共催：近畿労働金庫、関西 NGO 協議会、ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 運営委員会

後援：神戸新聞社、生活協同組合コープこうべ

第1回 高校生とワークショップで考える難民問題

○参加者22名（うち学生9名）

講師の中尾氏によるワークショップ形式で世界の難民事情について学びました。「〇〇な理由で国外へ行った人は難民か？」「難民が一番多い国はどこか？」「難民キャンプではどれくらいの食事を食べているか？」などの問いかけに対して高校生を中心とした参加者が回答する形で会が進行していきました。また、「自分が難民になるとしたら何を持っていくか？」という問いについてはグループワークで考え、発表し合いました。

参加者の感想（抜粋）

- 初めて知ることが多かった。自分が知っていた難民についての情報で実は間違っていることがあったとわかり、勉強になった。
- 自分が難民になるとしたら何を持って行くかという問いは、考えたことがなかったので悩んだ。もっとみんなと一緒に深められれば面白いと思った。
- 学校の授業とは違った参加型のワークショップで楽しめた。難民についてぼんやりしたことしか知らなかったが、一緒になって考えられたのでわかりやすかった。もっと深めないといけないと思った。

第2回 外国人の入管施設の現状と課題

○参加者 37 名（うち学生 9 名）

入管の実態とその問題を提起した『ルポ入管―絶望の外国人収容施設』の著者である平野雄吾氏を講師とし、入管収容施設で何が起きているのか、日本の入管制度および難民認定の実情や歴史、特徴、問題点などについて解説していただきました。また、後半はグループに分かれ、「日本は本当に難民を受け入れることができない国か？」という問いについて参加者同士で議論しました。参加者からは以下のような意見が挙がりました。

- ・ 難民を受け入れたい気持ちはあるが、実際受け入れたいかと聞かれるとどうなのか？
- ・ 日本の人口が減少する中で、難民も職業訓練をして受け入れてはどうか。ただ、難民を多く受け入れたドイツで難民反対の動きが出てきているように、労働力として受け入れても文化などの面で難しい問題がある。
- ・ フランスでのテロの犯人が難民だったことから日本では難民に良いイメージがない。
- ・ 言語や年齢、就業の問題など、受け入れた後の体制を整備する必要がある。
- ・ 自分たちが難民のことを知らなさすぎる。もっと今回のような議論をしていくべき。

- ・ 日本では学校で難民について学ぶ機会がない。教育を見直す必要があるのでは。
- ・ 政治が変わらないといけない。難民問題はあまり選挙の票につながらないが、積極的に訴えかけて変えていけないといけない。
- ・ 難民を受け入れられない言い訳ばかりしているのではないか。
- ・ 国際法をいかに国内法に落とし込むか。

参加者からの意見を受け、平野氏より「外国人の人権を考えることは日本人の人権を考えることでもある。欧米の人と話すときには human rights の話題がよく出るが、日本人は人権アレルギーがあるのではないか」というコメントが、また、第1回講師の中尾氏より「今の日本は外国人に来てもらわないと成り立たない。人権が守られないと、むしろ来てもらいたいと思ってもらえない」「実際には人口に比して外国人の犯罪が多いということはないのに、難民に対してネガティブな報道が多い」というコメントが述べられました。難民問題を学ぶとともに、我々事としての日本社会の問題について問われ、見つめ直す機会となりました。

企画に参加した学生の感想（抜粋）

多くの参加者から「難民について知らないことがたくさんあった」「このような機会をもっと設けることが難民への働きかけになる」という声を聞いた。難民についてまず「知る」機会を作り出すことが何よりも大切なのだと分かった。（黒瀬天孝さん）

この寺子屋で二つのことが印象に残った。一つ目は国際法である難民条約をいかに国内法に落とし込むかということ。日本と外国の入管の仕組みの違いや日本の入管施設が果たす役割の矛盾などを勉強したうえで難民条約を国内法に落とし込むべき意味や重要性を感じた。二つ目は政治と難民問題は深く関わっているということ。入管施設だけが問題なのではなく、政治が変わらないと難民問題も解決されないということに気付かされた。これらを変えるのは私たち若者であるにも関わらず、私自身政治に関して興味がなく友達との会話でも

政治に関する話題はない。政治について考えなくても当たり前で生活できている環境はある意味恵まれているのかもしれないが、問題はもっと身近なところにあるのかもしれないと思った。（山内優さん）

今まで、「難民」とはどこか自分とは関係のない遠いイメージがあったが、今回の寺子屋で「難民」を身近な存在だと認識して、自分自身の意識を変えることができた。同時に、難民について知るとは、世界の動きや情勢、かたちを学ぶことにつながるのではないと思った。様々な課題の根源となっているのが、私のように「難民」について無関心で無知な国民が多すぎる点だ。国民が何も知らないからこそ声も上らず、入国管理局の仕組みも政治も報道も変わらない。だからこそ、このような勉強会を継続していき、もっと広報していくべきだと感じた。（山村太一さん）

全体を通じて…

第1回で世界の難民事情について、第2回で日本の入管問題について学んだことで、難民の問題が日本社会や私たちの暮らしと地続きであるということや、自分たちが学び変えていく必要があるということを改めて考える機会となりました。特に第2回ではグループ内で活発な意見交換が見られるなど、参加した皆さんの難民や在留外国人の問題に対する関心の高さがうかがえました。今後も若者と大人が共に学び、議論を深めていく機会をつくっていきたいと思います。

スタッフ活動記録・今後の予定

活動記録

10/11	Hyomic（兵庫国際協力同志の会）に参加（芹田名誉理事、山口理事、立部）
10/14	神戸新聞取材（吉椿）
10/19	関西 NGO 協議会常任理事会に出席（吉椿）
11/1	舞子高校環境防災科「災害と人間」で講演（吉椿）
11/5	茨木高校 PTA の集い「KOBE から世界へ」で講演（吉椿）
11/13	災害ボランティアについて知ろう講座「足湯ボランティアとは」で講演（吉椿）
11/15	神港橋高校タウンミーティング「被災地 KOBE から世界へ」で講演（吉椿、山内さん）
11/17	たつの市民大学赤とんぼ学園教養講座「森と水と人の関わり」で講演（吉椿）
11/18	神戸工科高校で講義（立部）（11/25 にも担当）
11/19	コープこうべ「アフガニスタン 9.11 から 20 年、アフガニスタンの今」で講演（村井理事）
11/22	NHK 取材（吉椿）
12/10	アフガニスタンの若者のメッセージを共有する会を開催（勝川さん、黒瀬さん、柳瀬さん、山内さん、山村さん、村井理事、吉椿）
12/19	CODE 寺子屋「若者と難民について考える」第 1 回を開催（徳山理事、黒瀬さん、山内さん、山村さん、吉椿、立部）
12/20	関西国際大学「国際防災協力」で講義（吉椿）
12/21	CODE 理事会
12/23	関西学院大学 コープこうべの福祉講座「NGO とコープこうべ」で講演（村井理事）
12/26	CODE 未来基金食育イベントを開催（黒瀬さん、柳瀬さん、山内さん、山村さん、立部）
1/8	伊丹市立中央公民館「ぶどうがつなげる支援の輪～アフガニスタンの文化・暮らし～」で講演（村井理事）
1/9	佐賀 Okabase と関西学院大学生に講義（吉椿、立部）
1/12	龍谷大学国際特別講義「国際 NGO 論」で講義（吉椿）
1/15	真如苑助成金報告会に出席（立部）
1/17	震災 27 周年 大阪大谷大学「国際協力論 B」で講義（吉椿）
1/21	関西 NGO-JICA 協議会に出席（吉椿、立部）
1/22	愛媛グローバルネットワーク、JICA の NGO 提案型プログラム「多文化共生型の減災社会づくり実践研修」で講演（吉椿）
1/24	2021 年度第 2 回 NGO-JICA 協議会に出席（吉椿） CODE 寺子屋「若者と難民について考える」第 2 回を開催（平野雄吾さん、黒瀬さん、山内さん、山村さん、宮本副代表、村井理事、榛木理事、徳山理事、吉椿、立部）
2/4	近畿ろうきん尼崎支店推進委員会研修で講演（吉椿） 葺合高校市民専門講師で講義（立部）（2/18 には吉椿が担当）
2/8	葺合高校国際科グローバルスタディーズ II C で講演（吉椿）
2/10	関西 NGO 協議会常任理事会に出席（吉椿）
2/17	JICA 関西草の根技術協力事業有識者審査会に出席（吉椿） 関西 NGO 協議会理事会に出席（吉椿）
2/25	CODE 理事会
3/18	CODE 未来基金 勉強会（講師：和楽寺住職チーさん）（黒瀬さん、柳瀬さん、山内さん、山村さん、吉椿、立部）
3/24	「心の傷を癒すこと」上映会&斉藤幸平氏講演会でコーディネーター（吉椿、柳瀬さん（パネリスト））
3/28-29	第 4 回丹波農業フィールドワーク（杉田さん、中田さん、森本さん、山内さん、吉椿、立部）
4/26	CODE 理事会

今後の予定

5/20	関西学院大学で講義（吉椿）
5/21	関西 NGO 協議会総会に出席（吉椿）
6/11	CODE 理事会、2022 年度総会

通期の大学講義

神戸学院大学「ボランティア論 II」「社会防災特別講義 II」
親和女子大学「国際ボランティア論」

いつも応援してくださり
ありがとうございます！



【会費】

新雅彦、アントニオマルゴット、石原凌河、伊勢谷功、
稲見充典、大津暢人、北茂紀、越山健治、小林孝信、
師玉健男、白水士郎、横溝文夫、清玄寺、芹田希和子、
高橋貞美、立部貴文、田村快光、旦保立子、土居峻、

長澤雄二郎、西保昇、沼田實、兵頭晴喜、
平林典子、藤島真知子、細谷寛、正宗賀代、
水平企、満田里美、南裕子、村山日南子、山崎水紀夫、
山下由美子、吉永孝代

【ご寄付】

青木美津子、足立朋実、安達有吾、渥美公秀、新雅彦、
有田実枝、飯嶋朝子、飯田浩、石田和子、石田奈津子、
伊勢正、伊勢谷功、市丸仁一、井出賢、伊藤幸子、
稲原絵美、今井田正一、植田嘉好子、植前愼二、鶴飼卓、
宇田川規夫、江木宏志、江口節、大石理沙、大倉佳彦、
太田美穂、大津暢人、大湊幹郎、岡部徹、岡部由紀夫、
奥山隆生、小野寺土菜、笠置りか、鐘森雅之、神原佳予子、
上柳幸子、亀井加寿子、亀田彩子、菊地原博、岸桂子、
岸下正純、北茂紀、木下洋子、木村佐枝子、木村理恵、
桐山照美、楠井和子、郡あや子、個庫茶屋メンバー、
五嶋和子、児島正、越山健治、小林和子、小林貴子、
小林孝信、駒津敏行、斉藤茂樹、阪井健二、志岐悟、
師玉健男、島本久嗣、白水士郎、新濱文江、須賀幸一、
管義正、住野和子、芹田希和子、空野仁志、高野史織、

高橋貞美、高水一成、武久真大、武村須美子、立部貴文、
田辺エツ、田村快光、田村丈一、旦保立子、ちびくろ保育園、
都司恵理、辻口知子、辻並麻由、津田秀子、鄭恵姫、
中尾正嗣、中里一実、長澤絹江、長澤雄二郎、永田富士夫、
中村覚・佳代子、灘山光子、成毛佳季、
日本基督教団名古屋中央教会、沼田實、羽島新菜、
林アリス、林エミリ、林ひさ子、久安寿美、
兵庫県立舞子高等学校、兵頭晴喜、平林典子、婦木一葉、
婦木さくら、婦木風香、前田雄一、正宗賀代、
三浦真里子、水野明代、満田里美、宮里優子、宮武千代、
山口勝己、山口勝憲、山田千恵子、ヤマモトケイコ、
山本彰子、山本正紀、山本佳子、湯原武彦、柚原里香、
横溝文夫、吉川貴子、吉椿紘、吉椿琴、吉野恵子、
米田玲子、六車、和田俊江・幹司、渡辺知佐子、亘佐和子

— CODE Supporter's Voice —

北茂紀さんより

北と申します。仕事で建築の構造設計をしている関係で、これまで中国四川省地震、ネパールゴルカ地震、インドネシアロンボク島地震の際に、吉椿さんや増島さん、上野さんと現地へ同行させて頂きました。CODEの活動はその理念にある通り、現地で一人ひとりの声に耳を傾けます。物資の支援や大きな政策だけでなく、一人ひとり寄り添う姿勢がいかに大切であるかは、現地の人た

ちがCODEスタッフへ向ける親愛さによって実感することができます。私は今、この原稿をバングラデシュのホテルで書いています。業務としても海外とは関りを持ち続けており、なかなか上手いいかないことも多々ありますが、CODEの活動は今でも私に色々な示唆を与えてくれています。今後も皆様のご活躍を祈念しております。

北さん、いつもありがとうございます！

ご協力をお願い

みなさまからの応援があって、CODE は活動を継続できます。
お家から世界へ。 CODEが支援のお気持ちを届けて、世界とあなたをつなぎます。

海外で…

国内で…

支援プロジェクト

活動報告
講演会、寺子屋

地域とのかかわり

ご寄付、入会
ボランティア活動

寄付して応援

活動を継続するためのご寄付です。
全体運営、特定の救援プロジェクトへのご寄付の指定も可能です。
25% を上限に管理運営費とさせていただきます。

ボランティアとして応援

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などの
ボランティアを募集しています。
詳しくは CODE 事務局までお問合せください！

知って・学んで応援

あなたの住んでいる地域で開催される講演会に
CODE スタッフを講師として派遣します。
テーマ・内容等、お気軽に事務局までご相談ください！

サポート会員になって応援

【正会員（総会での議決権あり）】

個人・学生	：年会費 5,000 円 × 1 口以上
NPO/NGO	：年会費 5,000 円 × 1 口以上
企業・団体	：年会費 30,000 円 × 1 口以上

【賛助会員】

個人・学生	：年会費 2,000 円 × 1 口以上
NPO/NGO	：年会費 2,000 円 × 1 口以上
企業・団体	：年会費 10,000 円 × 1 口以上

ともに CODE を創ってくださる方を
いつも募集しています

お振込み方法

■ ゆうちょ銀行

支店名：〇九九（ゼロキュウキュウ）
支店番号：099
口座番号：0330579（当座）
口座名義：CODE

■ 近畿労働金庫

支店名：神戸支店
支店番号：642
口座番号：8881040（普通）
口座名義：CODE 海外災害援助市民センター

【郵便振替】

加入者名：CODE
口座記号番号：00930-0-330579

【クレジットカード】

CODE のホームページより ⇒
<https://code-jp.org/donation/>



※通信欄に用途をご明記ください。
（例「ウクライナ」「未来基金」「賛助会員」）

発行元 （特活）CODE 海外災害援助市民センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10
TEL：078-578-7744 FAX：078-574-0702

E-mail：info@code-jp.org
HP：http://www.code-jp.org/



Facebook



Twitter



Instagram